
恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

オルフェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜外史に降り立った悪魔狩人〜

【Nコード】

N9898X

【作者名】

オルフェ

【あらすじ】

ある日、突然のダンテに呼ばれ悪魔関係の依頼だと言つので嫌々ながらもDevil May Cryに呼び出されネロは駆けつける。

そこには古ぼけた鏡があり驚きの内容を語り出す…。

プロローグ（前書き）

ダンテやネロの口調の再現がかなり難しい…ご都合主義で恥ずかしい稚拙な文章で原作無視のオリジナルストーリーになってしまいかもしれません初めての投稿なのでどうかご容赦を…。

あゝ、マジで文才がない…。

ちなみに一刀は出ない予定です。

プロローグ

ネロ「アンタの話が本当なら、この骨董品の鏡が依頼をしたって言うのか？それも合言葉ありで」

“ Devil May Cry ” に突然呼び出されたネロは酷く機嫌が悪かった

ダンテ「ドラッグはやってないぜwほら、坊やにもちゃんと言いな」

『はっ、はい！伝説の魔剣士の血を継ぐ者よ！私達の世界を…外史を…救ってください！』

古ぼけた鏡が突然、光出したと同時に話し出した

ネロ「みたいだな…、悪魔絡みの依頼ってことはわかった。それで『私達の世界』ってのはどういうことだ」

『 私達の世界 “ 外史 ” は中国の三國志の武将が可愛い美少女だったら〜以下省略〜 』

ネロ「三國志か…、たしかクレドが好きで良く読んでたな」

ネロは、ほんの少しだけ寂しそうな顔をする

ダンテ「 Ha ! 要するに過去でパラレルワールドで可愛い子ちゃんいっぱいの世界ってことか！ China に行くのも初めてだ！ 」

対照的にダンテは子供ようにはしゃいでいる

『依頼を受けて頂けますか？報酬は貴方達が望む物を差し上げます』

ダンテ「こんな楽しそうな依頼は受けたい訳にはいかないぜ！報酬はピザとストロベリーサンデーを一年分だ」

即答だった…借金をチャラにするとかいろいろあるだろダンテ…。

r z

ネロ「図々しいことは百も承知だけどフォルトゥナの孤児院のガキ達の誕生日とクリスマスにプレゼントを頼めるか？キリエはガキが笑ってと本当に嬉しそうに笑うから…な」

ネロは頭を掻きながら少し頬を少し赤くして答えた

『失礼ですが…たったそれだけでいいのですか…？』

ダンテ「ガキの頃からの夢だったファンタジーの世界に行けて報酬は大好物一年分、貰いすぎなくらいだw」

ネロ「あんたにとっちゃ下らないかもしれないけど俺にとっての一番だ。」

『しかし、それだけでは私の気がすまないと言うか…なんと言うか………』

ダンテ「アゝ、って言われてもなあ…」

ネロ「じゃあ弾丸の補充頼めるか…？大昔だから銃なんてないだろうし、こっちから持っていくにしても限りがあるしな」

『いくら射つても弾切れしないようにすればいいのですね？チチン
パイパイナンチャラカンチャラ〜はい！これで無限に射てるよう
になっているでしょう』

ダンテ「ハッハー！マジでファンタジーだぜ！」

ネロ「ハハハ、マジか…便利な力だな……。まあいい、仕事をしに
行くか」

『それでは私の力で貴方達を外史に送ります。鏡の光に飛び込んで
ください…』

ダンテ・ネロ「OK」

『最後に一つお訪ねします…なぜ、私を信じてくれたのですか？罨
の危険もあったというのに』

ネロ「最初は正直言って疑った…だが、俺の勘がアンタが嘘を言っ
てないってからな、先行くぜ」

ネロがぶつきらぼつに言い放ち光に飛び込んだ

ダンテ「まっ、仮に罨だったとしても関係ない」

ニヤリとニヒルに笑ったダンテが言い放つ

『それはどういっ…』

ダンテ「刺激があるから人生は楽しい、そうだろ」

そう言い残し光に飛び込んだ

『誇り高き魔剣士の血を継ぐ者よ…どうか御武運を』

こうして誇り高き魔剣士の血を継ぐ者が二人のデビルハンター（悪魔狩人）が外史に降り立った

プロローグ（後書き）

ダンテやネロの使ってほしい台詞を募集します。
自信ないですけどリクエストには答えたいです…頑張ります

三人の少女（前書き）

うん、難しいです。

自分の文才の無さに泣けてくる…orz

ダンテは次回、登場予定です。

三人の少女

ネロは眩しい光を感じて目を覚ました。

起き上がり辺りを見渡すと、なにもない荒野、どこまでも広がっている。錯覚するほどの荒野であった。

「しけたところだぜ…ダンテは気にするだけ無駄だなダンテだし。」

一言呟き溜め息をつき、今の状況を整理しようとしたとき自分に向けられている視線に気づいた。

「コソコソ覗いてないで用があるなら顔見せな」

ネロはホルスターから取り出したブルーローズを左手に構え、眉間に皺を寄せながら不機嫌そうに荒野にある大きな岩に問う。

「あ、あはは。バレてました？右手…怪我してるんですか？」

桃色の髪をしたチョット天然そうな少女が苦笑いしたあとギブスで吊られたネロの右腕を見て心配そうな顔で問う。

「怪我してるわけじゃない、でも俺の右手はあんまり人に見せたくなくてな…心配してくれてありがとよ」

ネロは桃色の髪の少女の目を真っ直ぐ見て答え、ブルーローズをホルスターに収めた。

「いえいえ！お礼を言われることなんてなにもしてませんし！／＼

「／」

手を顔の前でブンブン振りながら照れながら否定する。

「俺に敵意はない、悪いな余計な気を使わせちゃまって」

桃色の髪の少女は全く気づいていないが、後ろにいる美しい黒髪の長刀を持つ少女と巨大な矛を背負った女の子は、ネロに敵意がないことが解ると構えていた武器をおろした。

「見たことない服に変な鉄の筒、変なお兄ちゃんなのだ！」

「コラッ、鈴々！初対面の人に向かって失礼だぞ！すみません…ゴホン、私は姓は関、名は羽、字は雲長と申します」

「私は姓は劉、名は備、字は玄德だよ！よろしく」

「鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

「姓も字もない、名はネロ、ここから遠く離れた西のフォルトゥナつて国から来た便利屋だ、仕事の依頼があつてさっきここに着いたばかりだ。よろしくな、劉備、関羽、張飛…でいいか？」

「はい ネロさんの国では姓や字がないのが普通なんですか？」

「姓はあるやつもいる字つてのはない、それと俺は孤児院育ちだから姓が仮にあつたとしても知らねえ」

「じっ、じめんなさい…！」

ガバツ！つと頭を下げた劉備という少女が謝る。

「気にするな。それで、あんた達はなんでこんななんもない所にいたんだ？」

「私が説明します。私達はこの乱世を鎮めるために旅をしているのです。そして菅路という占い師が人の世を救いし伝説の魔剣士が天より参られるという予言を出し、それを探しているのです」

「伝説の魔剣士？」

関羽の話に劉備は続ける。

「でも、なかなか見つからないんですよ！わかっているのは身の丈程のでつかい黒い骸骨の剣と細い片刃の剣を持つてることだけで…、最初はネロさんかと思ったんですけどネロさんの剣は骸骨の剣じゃないし…はあ」

「残念だったな…（骸骨の剣はダンテのリベリオン、細い片刃の剣は俺の閻魔刀のことか？）」

「鈴々は疲れたのだ！魔剣士なんてお伽噺の棲羽亜陀くらいしかないのだ！本当にいるわけないのだ！」

「鈴々、弱音を吐くな！きつと思つて…」

（スパイダの伝説まであるのか、ダンテが知つたら苦虫を噛み潰したような顔するんだろうな）とネロは心の中で思った。

つと、三人がネガティブオーラ全開で撒き散らし始めたのでネロは話題を変えた。

「さつき違う名前呼びあってたけみいたが、あだ名みたいなもんか？」

「あだ名じゃなくて真名ですよ あつ、真名は両親や親族の人に貰うから…」

「いや、俺の国にはマナ？なんてもんは元々ない」

「姓や字だけじゃなくて真名もないのだ？変な国なのだ〜！ビックリなのだ！」

「それは真名と言って親しい間柄でしか呼ぶことの出来ない神聖な真の名のことで、親しくない人が許可を得ず、勝手に呼んだりしたら殺されたりしても文句は言えないのです」

「OK、参考になった。真名ってやつで話しかけてブツ殺されなくてよかったぜ（殺される気はないけど）」

肩をすくめ、苦笑しながらネロが答える。

この時、ネロは心の中で思った。

（女運の悪さSSSのダンテなら間違いなく真名で呼ぶ、あげく挑発しまくって事態をややこしくするな。）

ネロが心の中で思ったことは、直後に現実起こることになる…。

赤い男(前書き)

恒例行事です。

赤い男

この地について情報が欲しかったネ口は今から町に行くという劉備達に同行することにしたのだが…。

「ネ口お兄ちゃんは背が高いから遠くまでよく見えるのだ！凄いだー！」

「鈴々！初対面の男性に肩車など失礼にも程があるぞ！あああ、ネ口さん申し訳ありません…」

「髪を引っ張らないようにしてもらえると、ありがたいんだがな…」

「鈴々ちゃんよかったね」

「桃香様も笑ってないで止めてください！」

「愛紗お姉ちゃんが嫉妬は見苦しいのだ〜！」

「ししっ、嫉妬などしてない!!!／／／」

「Damn it……（どうにでもなれ）」

美少女が両脇にいる正に両手に花、さらに頭に美少女という普通なら超がつくほど羨ましい状況なのだが、閉鎖的なフォルトゥナで育ったネ口はこの慣れない、姦しさに少々…いや、かなり精神的にまわっていた。

「ハア…（女難はアンタの役目だろうがオッサン）」

深い溜め息を吐きながらネ口が心の中で愚痴ていると、肩車されていた張飛が突然騒ぎだした。

「大変なのだ！真つ赤な服を着た男の人が賊に襲われてるのだ！！」

「ほつとけ、真つ赤な服の男なんて間違ひなく頭がイカれてる無視しとけ（この状況でアイツにあつたらストレスで胃に穴が空きそうだ）」

「ネ口お兄ちゃんは腰抜けなのだ！見損なつたのだ！」

張飛はネ口に怒鳴ると頭から飛び降り走っていった。

「鈴々の言う通りです！力無き人が襲われてるのに心は痛まないんですか！貴方には失望しました！！」

関羽は顔に露骨に怒りを浮かべながら、急いで張飛の後を追った。

「襲われてる人が目の前にいるのにほつとけだなんて酷いです！たしかに乱世では力の無い人が悪いって言う人もいます、でも…」
劉備は僅かに目に怒りの意思を込めながらネ口に詰め寄る。

「わかった、俺も行けばいんだろ…ハア」

ネ口はガツクリと項垂れ、この世界に来てから何回目になるか解らない大きな溜め息を吐いた後に言葉を続けた。

「荒野のド真ん中に女をたつた一人で置き去りにするなんて出来ないしな」

「えっ！？あははは…」

劉備は回りをキョロキョロ見回して自分が一人取り残されたことに

気付き、気まずそうに笑った。

「張飛達に追い付く、悪いな劉備、少し…跳ばすぜッ！」
と言い終わると同時に劉備を抱え（所謂お姫様抱っこ）疾風の如くネロは駆け出した。

「何を！？えええええ！顔が近つ、でもネロさんならあんまり嫌じやな…ノノノつて、速い怖い降ろしてえええええ！！！！！」

異世界に着いて目が覚めて早々、ダンテはチビ・デブ・ノッポのチンピラ三人組に絡まれていた。

張飛が見たのは、ちょうどその時だった。

「かつ、金になりそうな物をよこすんだな！そしたら命だけは助けてやるんだな！」

「兄貴、その剣たぶんかなりの業物だぜ」

「俺達は黄巾党だ！命が惜しかったら（ry）」

2メートル近い長身、鍛え上げられた肉体のダンテに多少ビビりながらも三人組は精一杯の虚勢をはる。

すると、ダンテは余裕の笑みを浮かべ素直にリベリオンを地面に突き刺す。

「持ってけよ、いいぜ」

「へっ、物分かりが良い野」…重ッッ！チビ、デブ手伝え！」

「もっ、持ち上がらないんだな」

「んぎぎぎぎ！マジかよ…」

持ち上がらなかった…。

「いらぬなら返してもらつ、悪いな」そう言つとダントは軽々とリベリオンを背中に担いだ。

「もう謝つても許さないんだな！！」

「ブツ殺してやる！！」

「こつちもスラムと大して変わらねえな。Hey!Commonw
inp!（来な、ノロマ野郎）」

ダントはボクシングのシャドーをしながら挑発する。

「意味不明なこと言いやがって！三人同時に行くぞ！せーのっ！」

このあと三人の賊は張飛、関羽が到着する頃には既にポッコボコにされていた。

「燕人張飛ただいま参上！鈴々が来たからもう大丈夫なの…だ……」

「これはいつたい…どういつ…」

「Ha-ha!あんまり見つめるなよ照れるぜ、まっ！良い男だから仕方ないか」

「真面目に相手にするだけ無駄だ、やっぱりアンタか…ダンテ。降りな、劉備」

「あ、ありがとうございます…（顔が熱いよお）／／／」

「ネロさん（お兄ちゃん）の知り合いですか（なのだ）！？」

「忌々しい腐れ縁の同業者だ」

「さっきは酷いこと言っちゃってゴメンなのだ…」

「なぜ一言、私達に説明してくれなかったのですか！？」
「やや厳しい口調で問いかける関羽であったが。」

「説明する時間があったか？まあ、いいけどよ」

「も、申し訳ありません…」

ネロの話も聞かず、しかも劉備まで置いて飛び出してしまったことを思いだし正にグウの音もでない。

「鈴々ちゃんも、愛紗ちゃんもあんまり落ち込んでたらネロさんが困っちゃうよ」

「愛紗って嬢ちゃんが困ってるぜ、おっと…」

「貴ツ様あああ！！許さん！！！！！！」

ガキイイイン

真名を言われて激昂した関羽の一撃をダンテはいつの間にか片手に持ったりベリオンで防ぐ。

「Ha-ha!なににキレてるかは知らないが、最ツ高だ!危険な女は嫌いじゃない」

「どうして…どうして、あの人は愛紗ちゃんの真名を呼んだんですか!」

「ああ、アイツも今日ここに着いたばっかだからな真名のことなんて何も知らないな」

「愛紗ちゃん落ち着いて!鈴々ちゃん!ネロさん!愛紗ちゃんを止めて!…鈴々ちゃん?」

「ほっとけ、剣で刺したくらいじゃ死なねえよアイツは」

「スパイダ…あのオジサンの持つてる骸骨の剣、絵本で見たのと同じなのだ…オジサンはきつとスパイダなのだ!」

「Hey!お嬢ちゃん俺はイカしたお兄さんだ!それと生憎、親父は親父じゃない、ダンテだ。ところで坊や、なんで黒髪の嬢ちゃんが怒ってるのか教えてくれよ!可愛い娘に嫌われたままじゃ寝付きが悪いんでね!発音が違ったか?」

「親父って…スパイダはダンテさんの…お父さ…ん!?!」
劉備は開いた口が塞がらなかった。

ビュン!ビュン!ブオン!

関羽から繰り出される青龍円月刀から繰り出される嵐のような斬激

は全て虚しく空を斬る。

「アンタが読んじまったのは真名ってやつで、本人が許した相手以外が勝手に読んだらブツ殺されても文句言えないくらいに失礼になるんだってよ、イカれたオッサン」

「アー、なるほど…嬢ちゃんが怒るのも当然ってわけか」

「ハアアアアア！！（この人は私ごとでは想像も及ばないほどに強い…しかし、せめて一太刀！全てをこの一撃に！！）」

その関羽の全身全霊の一撃は恐ろしいほど呆気なくダンテの体を貫いた…。

赤い男（後書き）

いや、戦闘描写…難しいですね。

ポリシーは女子供には優しく(前書き)

無駄に長くなってしまった…。

若干…むしろかなりキャラ崩壊してます。

「こつちに来て早々、可愛いBabyちゃん三人とデートなんてなかなかやるな。キリエの嬢ちゃんも苦労す「違う」冗談だ、ムキになるなよ」

ネロがこめかみに青筋を浮かべながらレッドクイーンに手をかけると、ダンテはまいったといった様子で肩を竦めた。

「H a - h a ! 俺だけ仲間はずれなんて水臭いぜ、坊や！俺はダンテ、「Devil May Cry」って便利屋をやってる！よろしく、お姫様」

ダンテは軽く自己紹介すると劉備たちにウィンクした。

「貴様！化生の類いか！逃げてください桃香様！鈴々！桃香様を守れ！」

「惜しいな、半分正解だ。正確には半人半魔、悪魔と人間のハーフ」

「はーふ？」

「悪魔の親父と人間の母さんとの間に生まれた間の子ってことさ」

「悪魔だと！人を謀るのもいいかげんに！えっ、なんですか桃香様？」

「愛紗ちゃん、落ち着いて…聞いて。その人は…ゴニョゴニョ」

「見慣れぬ異国の服…骸骨の…剣…魔剣士スパードは…悪魔でありながら…人間の見方…息子…なら私は…まさか…そんな…予言の…」

劉備の話聞いた関羽はどん顔が真っ青になっていく。
関羽が顔面蒼白を青ざめ肩を震わせるなかダンは張飛をからかって遊んでいた。

「ダンテおじちゃんのお父さんがスパイダなら、おじちゃんも魔劍士なのだ？」

「親父と兄貴は魔劍士だったが俺は銃を使うから正確には魔劍士じゃねえな。それと俺はまだ、おじちゃんなんて呼ばれる歳じゃないぜ、小さなお姫様」
そういつとダンは芝居がかった大袈裟な礼をする。

「鈴々は小さくないのだ！鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳って名前があるのだ！」

「そいつは悪かった、よろしくな」

「ダンテお兄ちゃん、兄さん、兄者…ピッタリこないのだ…」

「呼び捨てでいいぜ、張飛」

「じゃあ、鈴々はダンテって呼ぶのだ！ところでその鉄の筒はなんなのだ？ネロお兄ちゃんもそんなの持ってたのだ。鈴々、気になるのだ」

「どういうことだ、坊や？」

「ここは俺達の世界とは違うみたいだが大昔の中国、銃が発明される前なんだろ」

「なるほど…これは銃っていう武器でな、ガキが持つには早すぎる。もっと安全なのをお姉ちゃんに買ってもらいな」

「鈴々はガキじゃないのだー！怒ったのだ！避けるなのだ！！」
張飛は顔を真っ赤にして蛇矛をブンブン振り回すが全て…空振りした。

「H a - h a ! おつかねえ姫さんだ、機嫌直してくれよ」

そんなこんなでダンテと張飛はすっかり仲良く(?)なっていた。
そんなこんなでダンテの誤解は解け、互いに改めて自己紹介をした。

「申し訳ございません…魔剣士様に斬りかかるなど言語道断、弁明の余地もありません」
関羽は肩をワナワナと震わせ土下座した。

「美人に涙は似合わない可愛い顔が台無しだ、それに次に踊るならベッドの中にしようぜ」
ダンテは全く気にしていないという様子でウィンクをして答えた。

「びっ、びび美女などとお戯れはよしてください…わたしのような武者者など…／＼／＼」
関羽は真っ赤になった。

「ところで、この世界でのスパイダ伝説、それと予言のことを教えてくれ」

ダンテは初めて真剣な顔をして劉備に訪ねる。

「はっ、はい。まず悪魔でありながら正義の心に目覚めた魔剣士ス

「パーダは…」

少し緊張した様子で劉備が話し始めたスパイダの伝説は、ダンテやネロが知っているものと時代や時期に若干の誤差があるものの似通っていた。

「まったく、別の世界まで来て親父の尻拭いとは泣けてくるぜ…」

「別の世界ってなんなのだ？」

「俺でもよくわかんねえな。まっ、そこで俺と坊やはこの世界を救うって依頼を受けちゃったのさ」

「ダンテさん…ううん、ご主人様！」

「おいおい、俺にそんな呼ばれ方されて喜ぶ趣味はないぜ」

「私達に力を貸してください!!!」

劉備は強い決意を内に秘めた瞳でダンテを見る。

「まっ、美女の頼みだ。内容次第だな」

「戦えない、力なき人たちを守るために…。力があるからって好き放題暴れて、人のことを考えない悪魔みたいなやつらをこらしめるために！みんなが笑って暮らせる世のために！」

そう言っつて劉備が頭を下げると、関羽、張飛も頭を下げた。

「アー…、悪いが断る。悪魔なら大歓迎なんだが人間同士の戦争なんて興味なくてね。まっ、気が向いたら手伝ってやる（憎しみの集まる戦場なんかには悪魔は集まりやすいしな）」

「そう…ですか…」
断られた三人はションボリしている。

「そこにスパイダの血をひく騎士様がいるんだ、そっちに頼みな」

「…えっ!?!」

「おいっ…、勝手に話を進めんじゃねえよ」

「右手も閻魔刀も見せてないだろ、見せてからの反応で決めたらどうだ?」

「Fuck! (クソつたれ)」

ネ口は眉間に深い皺を浮かべてギブスを右手のギブスを外した。

現れたのは人の物とは思えない悪魔の右手。

そして右手から“閻魔刀”を取り出した。

「…」

一瞬の沈黙。

それを破ったのは張飛だった。

「かつ、格好いいのだ! 鈴々もそれほしいのだ!」

「その右手ってなんでも入るんですか? 私よく物なくすからあったら便利かな」

テンション上がりまくりの二人。

関羽は

「防具として使い勝手がよさそうな…それより、あの剣かなりの業

物の……」

自分の世界に入りブツブツ呟いていた。

「……怖くないのか？」

ネロの予想の遙か斜め上をいく反応に呆気にとられていた。

「……なにが（ですか・なのだ）？」「」

「ネロさんはちょっと怖いけど優しいし。ネロさんはネロさんだよ
あつ、いけないご主人様っていわなきゃ！」

「ご主人様は絶対に却下、全力で拒否する。ネロでいい」

「H a - h a ! モテモテだな坊や！」

「黙ってる！」

「えつと改めて私の真名は」

「とりあえず町についてから話そうぜ……」
心底疲れたといった表情でネロが呟く。

「……あつ……」「」

三人は町に行くことをすっかり忘れていた。

ポリシーは女子供には優しく(後書き)

なかなか話がすすまないです、はあ…。

ダンテの魔具もどんどん使っていきたいんですけどね。

やっぱり文を書くのって難しい。

お人好し

ネロとダンテは劉備たち三人の案内で無事に町にたどり着くことが出来た。

道中、様々な情報を交換しあい、また三人から二人は真名を託された。

全員空腹だったので町の飲食店で大量のメニューを注文をした、テーブルの上にはたくさん料理が続々と運ばれてくる。

注文した後で、重大な問題に気付いた。

「どうしよう、愛紗ちゃん…」

「この店主と交渉して注文した品々の値段分、働くしかありません…」

「鈴々たちは、お兄ちゃん達がお金いっぱい持ってると思ってたのだ…」

三人の財布の中身は雀の涙、財布をひっくり返してみたが、悲しいかな小銭が数枚しかない。

謂わば、“お財布 must Die!”の状態である。

「こつちに来たばっかなんでトマトジュースを買う金もなくてね」

万年金欠状態のダンテにとっては普段通りなので全く慌てていない。

黙って席を立ち店を出ようとするネロに鈴々と愛紗が突っかかり、桃香が捨てられた子犬のようなすがるような潤んだ目で見える。

「ネロお兄ちゃん！どこにいくのだ！」

「私たちは一蓮托生、一人だけ逃げようなんてひどいではありませんせんか！」

「ネロさん、見捨てないでください」

「なにも注文してないし、出された水すら飲んでない俺がなんで、お前たちの金を払わなきゃいけないんだ、アツ？」

ノリノリで桃香のお勧めを注文したダンテと違って、ネロは悪魔的な勘の良さで、本当は空腹ではあったが全て「いらぬ」と断っていた。

つまりネロは四人が注文した代金を支払う義務が全くない。

「……」

至極真つ当なことを言われ、しかも二人にタカろうとしていた三人は罪悪感からかグウの音も出ない。

「じゃあな」と言って四人を残しネロは店を去ろうとしたのだが

ガシャン

という陶器の割れる音に足を止めた

その音の聞こえた方を見ると、フリフリのフリルの着いた可愛らしい服を着た店員と思わしき三人の少女が見るからに頭の悪い五人の酔っ払いに絡まれていた。

「うっせえな……」

ネロが吐き捨てるように呟くと隣から出てきた中年の女性が話し始

めた。

「あいつらはこの辺で悪さしてる賊だよ。客や店の子に絡む、金は払わない、注意したら暴れる、嫌になるよ……」

「なるほど」

「やめときな、あつちは数もいるんだ。それにあんた右手怪我してんだろ？危ないよ」

「右手？使うまでもねえよ」

「ちつとぐらい触ったって減るもんじゃねえだろ！」

「??」「ここはそういうお店じゃないの〜！」

「まだ料理は来ねえのか！こっちは何時間待ってたぞ！」

「??」「他のお客様もおんねん！こっちも順番つてもんがあるんや！」

「??」「他のお客様のご迷惑になられるような行動はお控えください」

「うっせえブス！傷女は黙ってる！」

「ッ！」

身体中に傷のある少女が掌に爪が食い込むほど拳を握った。

その時、ネロが無表情で身体中に傷のある少女に歩みより顔をジッと見つめる。

「美人の間違いだろ？頭だけじゃなく目も悪いのかあんたら？」

「ヒューー！坊や！後で俺にもちゃんとその可愛いお嬢さんを紹介してくれよ！美女とお友達になるのが坊やだけってのは不公平だぜ！」
桃香たちと一緒に席に座っているダンテが大声で話しかける。

「？？」び、美じ！可愛いっ！？お、おおお客様ご冗談は止めてくだだささい…／／／／」

「「悪いがお世辞つてのは苦手だね」「」
ダンテとネロの声が見事にはもった。

「？？」風ちゃん顔真つ赤なの」

「？？」照れることないで風い」

「女の前だからって粹がりやがって！格好つけんじゃねえ！！」

挑発されたあげく無視された賊の一人がネロに殴りかかる。

その拳をネロはあっさり左手で掴み、軽く力を込める。

レッドクイーンという大剣を左手一本で自由自在に振り回すネロの握力は尋常ではない。

当然、少し力を込めただけでネロに掴まれた賊の拳は悲鳴をあげた。

メキメキメキメキ

「悪いな、軽く握手したつもりだったんだがな」
ネロは皮肉タツプリの笑みを浮かべ、手を離す。

「ギャアアアア！！手が…手があ…いてえよう…」

「俺たちに逆らって唯ですむと思っ、プギツ！おふえのはががががががが…」

賊の一人が言い終わる前にネロは踏み込み左手で顔面を殴りつけた。殴られた賊は鼻の骨が砕け、歯が何本も折れている。

「What's you say? . . . Huh! (なんか言ったか？ハツ!)」

「こ、この野郎！！ブツ殺してや、放せ！放してください！あっあああああ…」

もう一人の賊は剣を抜いて斬りかかったがアツサリと避けられ顔を掴まれ属にアイアンクローと呼ばれる技をかけられ失神した。

「残ったのはアンタだけだ」

ネロは“アニキ”と呼ばれていたリーダーらしき男の胸ぐらを掴み左手一本で持ち上げ殺気を込めて睨み付ける。

「ヒッ、ヒイイ…」

「Be gone! (失せろ)」

「たっ、助けてくれえええええ！！！」

アニキと呼ばれた男が色々汚いものでズボンを汚しながら逃げていくと、残りの賊もヨタヨタしながら蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

と同時に店内で歓声上がる。

「よくやった兄ちゃん！」

「胸がスツとしたぜ！」

「ねえねえ、あの人かっこよくない？」

「フン……」

ネロは照れ臭いのか鼻をならして静かに店を出ていこうとするが

「勝手に出ていかれちゃ困るよ、私の料理まだ食べてないだろ？」

さっき話したオバチャンが腕を組んで店の出入口に立っていた。

「残念だけど手持ちが無くてね」

なにも持ってないということアピールするように両手を広げ肩を竦める。

「お代は結構、迷惑なチンピラをやっつけて店の看板に泥を塗るなんてこともなくて済んだからね、あっちに座ってる連れと一緒に好きなだけ食べてって頂戴！」

どうやらオバチャンは食べると言うまで一步も退く気はないようだ。

「それじゃ、頂くよ」

「美味しい料理をお腹いっぱい食べさせてあげるから、逃げんじやないよ！」

と言うとオバチャンは満面の笑みを浮かべながら厨房に向かって駆けていった。

「まったく、フォルトゥナでも、この世界でも、本当にお人好しに

は縁があるな…」

ネロは幼馴染みで、姉のような存在であり、恋人でもある愛しい人のことを思いだし呟き…小さく微笑んだ。

女難の相（前書き）

なんか今回はいつも以上にグダグダです…。
うっん、関西弁難しい。

女難の相

ネロが桃香たちのいる席に戻ると、先ほど賊に絡まれていた少女たちが礼を言いに来た。

銀髪の真面目そうな少女が楽進、関西弁の少女が李典、ポニーテールの少女が于禁とそれぞれ名乗った。

楽進が礼と自己紹介をしているときにお腹が可愛らしく「く〜」と鳴いてしまい一緒に食事をする事になった。

楽進も最初は顔を真っ赤にして遠慮していたのだが、続々と運ばれてくる美味しそうな料理の匂いと李典と于禁がもう席に座って食べ始めてしまった様子を見て申し訳なさそうに席に座った。

「青椒肉絲と酢豚とご飯おかわりなのだ！」

「甘いものは別腹なの、杏仁豆腐おかわりなの〜」

「そういえば、お腹いっぱい食べたのはこの旅で初めてかも…幸せだなあ」

「桃香様、恥ずかしいので涙を拭いてください」

「ダンテさんもネロさんも異国の人なんか。ところで腰に差しとる武器はどうゆう武器なん？ごっつ職人魂を感じるわ」

「育ての親の婆さんの形見の品だね」

ダンテはアイボリーを取りだし銃身に刻まれた文字のスペルミスの部分“BY・45 ART W「ARKS”を愛しそうに親指で擦った。

「ブルーローズは改造しすぎて元の形もわかんねえし、教団じゃ卑しいもの扱いだったんだけどな、そんなこと言われたのは初めてだ」
ネロは照れ臭いのかブルーローズをクルクル回しながら、そっぽを向いて答えた。

「やっぱり大切なもんなんやなあ。はあ、そうやなかったらバラ…分解してみたかったんやけどな」

「おつかねえ嬢ちゃんだ、これはいくら美女でもこれは渡せないぜ」
ダンテはおどけながらアイボリーを隠す。

「勘弁してくれ…」
ネロはブルーローズをホルスターに収めた。

「物は相談なんやけどネロさんの剣がどないな絡繰になつとるか見せ」
「断る」
「やっぱりそうなるわなあ…はあ。ってなんで隠すんや？ほんま堪忍！この通りや！意地悪せんと見せてえな〜！」

「沙和、真桜、少しは遠慮というものを…はあ」
溜め息をつく楽進にダンテが話しかける。

「楽しんでるか？」

「は、はい…」

「そいつはよかった、食事に誘った可愛い女の子に溜め息なんてつかれたら凹んじまう…」

ダンテは芝居がかった大袈裟な泣き真似をする。

願っていたす！私と一手、手合わせ願いたい！」

「ハア……」

ネロは大きく溜め息をついてダンテを見る。

「H a - h a - h a ! 参ったね、良い女に誘われたら断れない！どうやら本当にこの国はjackpotみたいだな、坊や！」

ダンテはハイテンションだった。

「俺に話を振るな……」

このオッサンに今すぐ魔人化バスターを力の限りかましたい……ネロは心の底から思った。

女難の相（後書き）

話がなかなか進まないのので確証はないですが、次回くらいに悪魔を出す予定です…。

悪魔狩人（前書き）

なんというか、ダンテ無双です。

仕方ないよね、ダンテだし…。

今さらですがフォルトゥナの事件から一年後、ダンテは勿論のこと
ネロもかなり強くなって魔人化無しでも幻影刀くらいは出せるとい
う設定です。

御都合主義ですいません…。

悪魔狩人

「ネ口だ。頼みごとがあるんだっいたらまずは名乗ったらどうだ？」
明らかに不機嫌なネ口。

「優しくしなきゃモテないぜ、坊や。俺はダンテ、お見知り置きをお嬢さん」

ネ口を茶化しつつ芝居がかった大袈裟な礼をするダンテ。

「は、これは御無礼を。私は戯志才と申します」

「風は、姓を程、名を立、字は仲徳と申します」

「失礼。では、改めてネ口殿、ダンテ殿：私は姓は趙、名は雲、字は子龍と申す！一手、手合わせ願い」「待たれよ（つのだ）！！」「どちらかな？」

趙雲は鈴々と楽進を睨む。

「鈴々は張飛なのだ！ダンテとネ口お兄ちゃんと勝負するのは鈴々なのだ！」

「私は楽進。私たちも食事の後にでも御二方に手合わせを頼もうと思っていました。張飛殿との約束が既にある御様子、次の機会というわけにはいきませんか？」

「これほどの武を持つ人物と手合わせできる機会など少ない、楽進殿は次の機会などと悠長なことが言えるのですかな？」

「ッッ！」

「そうなのか？」

疲れきった表情でネ口は李典と于禁を訪ねる。

「あー、堪忍な…」

「ごめんなさいなの…」

二人は気まずげに答えた。

「気にすんな、俺はやらないしな」

「ほう、それなりに容姿に自信はあったのですが、ネ口殿は女性からの誘いを断るのですかな？」

趙雲が挑発的な笑みを浮かべる。

「悪いな。生憎、俺は既に心底惚れてる女がいるんでね」

「こんな良い女からの誘いを譲ってくれるのかい、坊や？」

「年長者は敬え」あんたの言葉だろ？全員譲るよ」

「まさかダンテ殿一人で我々全員の相手をするおつもりか？自分の驕りで死んでも苦情は受け付けませんぞ」

趙雲は殺気と怒りを込めた視線がダンテに突き刺さる。

「心臓をブチ抜くくらいの刺激的な女じゃないと満足出来なくてね」本当に楽しくて仕方ないといった顔でダンテは笑う。
愛紗はとても気まずそうにそっと目を逸らした。

「鈴々がギツタンギツタンにしてやるのだ！」

「ダンテ殿、私たちが侮らないでいただきたい…」

「せやで、怪我しても知らんからな」

「ここまで言われたら私たちも退けないの」

「やるなら町の外でやってくれ事情聴取なんてされたら面倒だ」

「それもそうだな、こっちに來てまで借金なんてしたくない」

そう一言残すとダンテは殺気だつ趙雲たちと一緒に店を出ていった。残された店内で気まずい空気の中、ネロはゆっくりお茶を飲んでいく。

「私は武のことはわかりませんが星殿はかなり強いですよ、心配ではないのですか？」

戯志才はオロオロしている。

「その程度で心配しなきゃいけないような奴なら一年前にアイツと戦った時に俺が殺してる。もつとも、そのときは俺が今日の愛紗みたいに遊ばれたけどな…ダンテたちの様子を見に行くんだろ？美味かった。いつでも來てちょうだい！あんたみたいな色男なら大歓迎だよ！」フツ、また來るよ」

ネロは苦笑しながらゆっくりと残りのお茶を飲み干し店長の女性に挨拶をして店を出ていくと桃香たちもそれに続いた。

「ネロさん、今日の愛紗ちゃんみたいって、えっ！まさか…」
速足で着いてきながら桃香が引き吊った笑顔で訪ねる。

「地面が陥没するくらい本気で何発もブン殴って串刺しにして磔にした」

ネロは、そのときの事を思い出したのか忌々しそうな顔をする。

「ダンテ殿はどれ程…強いのですか…」

愛紗が声を震わせながらも真剣な表情で問う。

「さあな、俺も本気のダンテは見たことがないんでね。少なくとも兵隊が何百万人集まっても、どんな罫を仕掛けられてもアイツは余裕で生き残るだろうな」

「…御二人は何者なのですか？風には只の便利屋さんには見えないのですよ」

程立が首を傾げながらネロを観察する。

「表向きは只の便利屋だけだな。本業はデビルハンター、この国に来たのも依頼があつたからだ」

『でびるはんたー？』

ネロ以外は聞きなれない単語に首を捻る。

「まあ、その説明はあそこでやってる手合わせの決着が着いてからでいいか？まあ、時間はかかんねえだろうけどな」

ネロにつられて視線を向けとそこでは

「…「なっ!?!」「」「」

ガキャン！ガキン！ガガガガガガガ！！！

最初に聞こえたのは騒がしい金属音。

次に目に飛び込んできたのは武の達人と言える程の腕を持つ趙雲、張飛、楽進、李典、于禁をたった一人で圧倒するダンテの姿があった。

「Sweet!! Babys!!」

「ハッ…ハッ…舐めるなあ！はいはいはいはいはいはい！
！！」

「うりやりやりやりやりや！！」

「一回！も！掠り！も！しない！の！！」

「ッ！どないなっとなねん！」

趙雲と張飛の二人がかりの連続突きをリベリオンの連続突きで叩き落とし、同時に于禁の二刀による斬撃を全て弾く。
李典の背後から不意を狙ったドリルのような槍による突進するような突きも、闘牛士のようにマントを翻し回避する。

「この一撃で決める！ハアアア！！！」

距離を取り、気を溜めていた楽進は自身の持てる限りの気を拳に込めた一撃必殺の気弾を放つ。

ダンテは、その気弾を渾身の右ストレートで相殺した。

舞い上がる土埃、その土埃の中から出てきたダンテは無傷、相変わらず余裕の笑みを浮かべたままだった。

目の前の出来事が信じられないのか呆然として言葉が出ない少女たち

沈黙

ダァン！

その沈黙を破ったのは若き狩人の放つ一発の銃声。

「お楽しみのもとこ悪いが招待状も持っていない連中がパーティーに参加したいってよ」

「女と遊んでるんだ、早急に帰ってもらわないと朝になっちまうな」

突如、辺りに浮かび上がる幾つもの赤い魔方陣。

そこから聞こえる強烈な呪詛の言葉、向けられる殺意。

『スパードアアア』

『スパードアア』

『裏切者』

『スパアアード』

『ダンテエエエエ』

『逆賊』

『スパアードアアア』

『ネエエ口オオオオ』

赤い魔方陣から突如現れた数多の死神たちは、周囲を飲み込まんばかりの憎悪と殺意を撒き散らしながらダンテとネロに襲いかかった。

悪魔狩人（後書き）

次は、どうにか魔具を使いたい…。
ちなみに作者お気に入り魔具はケルベロスです。

狩り〜前編〜（前書き）

戦闘描写が難しいので、前編・後編に分けて投稿する予定です。
誰か、文才をください…。

狩り〜前編〜

「あ…の化物はなんなんですか…？スパイダ…御二人の真名？」

「悪魔だ、町の人間を皆殺しに来たのさ。細かい説明はこいつらを始末してからだ」

真っ青な顔の戯志才の質問に何の気なしに答えるネロ。

「悪魔なんているはず…風は悪い夢を…」

「王子様のキスで起こそうか眠り姫？」
愉快そうに笑うダンテ。

紅い魔方陣から続々と現れる異形の化物の群れ、その数はどんどん増えていく。

不気味に光る血のように紅い瞳は強烈な殺意を灯し、地の底から響くような声は悪意を放つ。

しかし、二人は軽口を叩き余裕の表情を崩さない。

「初めて来た国だつてのに見知った顔ばかりだな！Hey！同窓会でもやるうってのかい！」ふざけた態度をそのままに、ダンテはエボニー&アイボリーをクルクルと回す。

「Ha！思ったより少ないな」

背中のレストランを地面に突き刺しハンドルを捻る。

「わ…たし…も戦います…！私は頭も良くないし、強いわけじ

やない…でも、なにもできずに見ているのは嫌だから！」

桃香は剣を構えた、へっぴり腰でガクガクと震える膝を抑えて、それと正反対の強い意思を持った瞳、その瞳が少女たちの心を縛っていた恐怖という鎖を断ち切った。

「桃香様を守るのが私の使命、必ず守り抜いてみせましょう」

「鈴々も闘うのだ！」

「武人として手合わせに乱入など例え化生であろうと許せません」

「フツ、さつきあれだけ動いたんだ、疲れてんだろ？」

優しく笑いながら心配するネロだったが、その心配は杞憂だったよ
うだ

「私たちはずっと三人で旅してきたの、凧ちゃんが戦うって言うなら私たちも戦うの」

「せやな、うちらはまだまだ元気一杯やで！」

「なかなかガッツがある…でも、お嬢ちゃん達は観客だ。俺達が主役のパーティーだからな、ネヴァン！」

ダンテの右手が光り、何処から現れたのか紫電を纏った大鎌が握られている。

「ダンテ殿、その鎌はいつたいたい…なっ!？」

大鎌は紅い髪、死体のように青白い肌、紅い瞳、豊満な肉体を持つ冷たい印象を与える半裸の妖艶な美女に姿を変える。

『この姿にしたってことは…やっと私の体が恋しくなったのね？そ

れとも、こんなにたくさん処女を集めて私への御褒美?』

「「「「「ツツツ!!! / / / / 「「「「「」

自身の秘密を暴露された少女たちの顔が朱に染まる。

「そこにいるのはダンテのツレだ…食うなよ。よりによってなんでネヴァンなんだ…頭痛がしてきた」

ネロは眉間を押さえる。

「せっかくパーティーだから、そこにいるお嬢さん達にも楽しんで貰おうと思ってね」

『いいわよ。その代わり後で私を抱いて哭かせてちょうだい』
ネヴァンはダンテに絡み付く。

「お嬢さん達にあのクズを近づけるな、ちゃんと出来たら御褒美だ」
そう言っただんテはニヤリと笑うとネヴァンは腰をくねらせ少女たちのもとへ歩き出す。

ネヴァンはダンテがいつも事務所で聞き、時に自分を掻き鳴らし演奏した曲を歌い始める。

すると、少女たちを護るように数百匹の紫の雷を纏う黒い蝙蝠が飛び回る。

「いい曲だ、気分が乗ってきた」

ネロもニヤリと笑い、ギブスを外し青い光を放つ右手を解放した。

「H a - h a - h a - h a ! I t i s t h e o p e n i n g
o f t h e c r a z y p a r t y ! ! ! 」

ダンテは叫び紅い閃光になって悪魔達に襲い掛かった。

狩り〜前編〜（後書き）

っというわけでネヴァン姉さんに出てもらいました。
文でエロさを表現するのが難しいです…。

狩り〜後編〜（前書き）

先頭描写が恐ろしいほど難しいです…。

ちなみにネロがかなり強くなってるという設定なのでゲームにない技が使えるのはご容赦を…。

『スパアアード』

『スパードアアア』

『スパアードアア』

「Ha-ha! フォルトウナには最近ほとんど出てこないから運動不足だね! ウォーミングアップは終わりだ! 練習相手になってもらうぜ!」

と言うとレッドクイーンを背中に収め、淡い光を放つ半透明の蒼い幻影刀を魔力で何本か作り出し悪魔に向かって放つ。

クルクルと回転しながら飛来する幻影刀を受けた悪魔はズタズタに切り裂かれ砂に代わる、幻影刀も何体かの悪魔を切り裂くと碎けて霧散した。

「まずまずだな」

ネロは小さく笑った。

「凄い…」

「初めてです、あの二人を止める策が何一つ思い付きません…」

「あんな滅茶苦茶な戦い方をする人達に策は通用しないのですよ…」

桃香は二人の戦いを見て予言の魔剣士の血を引くものだと確信した。戯志才と程立の策士は呆然とする。

だが、本当に驚いているのは武人である少女達。
自分より遙か高みにある二人の武を食い入るように、指の動き一つも見逃さぬように見ていた、いや、見惚れていた。

「程立殿、あれは滅茶苦茶な戦い方などではありません…変則的に見える体捌き、あれは全て基本に忠実です」

「確かに膂力や才能も規格外ですが、それ以上にどれほどの鍛練を、修羅場を越えたのでしょうか…」

「ダンテもネロお兄ちゃんも凄いのだ、鈴々はあんな綺麗な太刀筋見たことないのだ！」

「剣だけじゃないの、バンバン射ってるのが全部、化物の眉間に命中してるの」

「人間技ではない…あれほど膨大な気を暴走させずに完全に制御するなど…」

「ウチらとの手合わせはホンマに只の遊びだったんやなく、今みたいに本気出されとったらと思うとゾッとするわ」

『うふふ、本気？ダンテもネロの坊やもあいつらと遊んでるだけよ。あんな面倒なことしないで、この辺一帯を消し飛ばせばいいのに』

「消し飛ばす…ネヴァン殿で宜しいですか？『いいわよ、お嬢ちゃん』ヒッ！か、消し飛ばすことなど可能なのですか？」

戯志才は勇気を持って半裸の女性ネヴァンに訪ねる。

『うふふ、戦ったことないから坊やのことはよく知らないけど、ダンは簡単に出来るわ、こんなふう』

ネヴァンが妖艶な笑みを浮かべ、パチン！と指を鳴らす。

すると少女達に襲い掛かろうとするも蝙蝠の結界に阻まれ身動きの取れなかった悪魔達に紫色の特大の雷が落ちた。

落雷を受けた地面は焼け焦げ、深く抉れ、そこにいたはずの悪魔達を跡形もなく消し飛ばした。

『身構えなくても平気よ、ダンの命令だもの襲ったりしないわ嫌われたら使ってもらえなくなったら悲しいもの』

「なぜ…ネヴァン殿はダンテ殿に従うのですか？失礼ですが、失礼ですが風にはネヴァン殿が命令に従うように見えないのですよ……」程立が恐る恐る訪ねる。

『ダンテがネロの坊やくらいの歳の頃に殺し合っただね、擦じ伏せられちゃった。強い者に弱い者が従う、これは悪魔も人間も同じかしら？それにダンテみたいな色男に使ってもらえるのって最高よ』
ネヴァンはウツトリと恍惚の表情を浮かべ、そして腰をくねらせ歩き出す。

『またね、お嬢ちゃん。坊やが交代に来たみたいだから、私はダンテと遊びたいから行くわ』

そう言い残しウインクしてネヴァンは消えた。

鞘に入った閻魔刀を構え、紺色のコートを靡かせて全速力でネロは走る。少女たちの後ろに鎌を振りかざし襲い掛かる数体の悪魔が見えたから。

悪魔の存在に気付かない少女たちは武器を構えようとする。

「動くな!!!フツ!!!」

ネロは速度を上げて少女たちの横を走り抜け。

シャキン

超高速の居合いの連撃を繰り出した。

一瞬の静寂、悪魔たちも少女たちも何が起きたかわからず動けない。
ゆっくりと閻魔刀を納刀する。

カチン

「Die!」

悪魔はバラバラになって崩れ落ちた。

「もっと力を抜かなきゃだめだな…怪我はないか？」

ネロは不機嫌な顔をしながら閻魔刀をゆっくりと右腕の中に収めながら訪ねる。

少女たちは何故か顔を赤く染めコクンと頷いた後、一斉に質問しようとする。

「まあ、質問したいこともあるだろうけどちょっと待て!ダンテが来てからだ、ネヴァンが張り切ってたからすぐ終わるだろうしな」
ダンテの方に視線をむけると凄まじい爆音と叫び声が聞こえ始めた。

この後、ダンテとネロが少女たちに質問攻めにされたのは言いつまでもない。

狩り〜後編〜（後書き）

久しぶりにDMC3をやってネヴァン姉さん縛りでバージル鬼いさに挑んだら、瞬殺されました（苦笑）

一番好きな武器なんですけどね〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898x/>

恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

2011年11月22日02時02分発行